



連載コラム



みずき野と その周辺の 植物と昆虫



第3回



タンポポと類似の野草たち



本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫

(3) タンポポと類似の野草たち

春から初夏にかけて、野には黄色い花が目立ちます。なぜこの季節に黄色い花が多いかについては決定的な学説はないようですが、この季節に現れる昆虫は黄色い花が好きだからという説があります。花は一般に繁殖のために受粉を必要とし、そのためには昆虫の助けが必要なので、長い進化の歴史を経て、この季節に黄色い花が多く見られるようになったのかも知れません。

黄色い花を付ける植物の中でも、タンポポやニガナなど、キク科のタンポポ亜科の野草がとくに目立ちます。そこで今回はそれらの植物について述べてみたいと思います。



キク科の頭花 (例: ヒマワリ)

それに先だって、キク科の植物の花の特徴について、ヒマワリを例にして説明しておきましょう。キク科の植物は一般的に茎や枝の先に頭花を着けます。頭花は一つの花のように見えますが、実際はたくさんの花が集まったものです、頭花の周辺の黄色い花びらに見えるものは一つ一つが花で、舌状花とよび、一

方、頭花の内部にぎっしり詰まった管状のもの一つ一つも花で、管状花(=筒状花)とよびます。ただし、管状花がなく舌状花ばかりの頭花をもつものや、舌状花がなく管状花ばかりの頭花をもつものもあります。タンポポの仲間の頭花は舌状花ばかりで構成されています。

また、キク科の頭花は一般に、総苞という器官によって支えられています。総苞については、次のタンポポで説明します。

(1) タンポポ：在来種と外来種



タンポポの総苞

総苞とは多数の苞葉（通常の葉が変化した小さな葉で、花や花穂の下に着く）が集まったもので、頭花をつぼみのうちから保護する役目をもっています。この総苞のかたちや大きさがタンポポの種によって異なり、タンポポの分類の基準になります。

在来のタンポポには、ツクシタンポポ、カンサイタンポポ、トウカイタンポポ、カントウタンポポなど、地域により異なる種

が分布していますが、それらの総苞はそれぞれ、かたちや大きさに違いはあれ、総苞を構成する小片はすべて上を向いています。これに対し、ヨーロッパからの帰化種、セイヨウタンポポとアカミタンポポは、総苞の外側の小片が開いて、下に垂れています。しかし近頃は、在来種と帰化種の中の雑種が増えてきて、総苞のかたちのみでは、在来種か帰化種かの識別が難しいといわれるようになりました。



カントウタンポポ
第2調整池の北隣接地



セイヨウタンポポ
7丁目路傍

総苞の
違いに注目！



カントウタンポポ
第2調整池の北隣接地

茨城県の在来種はカントウタンポポと考えられます。したがって帰化種との雑種も、一方の親はカントウタンポポということになります。一方、帰化種セイヨウタンポポとアカミタンポポはきわめてよく似ており、外観では種子の色でのみ識別が可能です。守谷全体での記録によれば、セイヨウタンポポの方がアカミタンポポよりずっと多いようです（「もりやの自然誌」守谷町教育委員会2000年）。

タンポポは在来種も帰化種も多年草です。在来種の花は春だけに見られますが、帰化種は両種とも春以外の季節にも花を咲かせます。土手の下などの日のあたる暖かい場所には、真冬にも帰化種の花をみることがあります。

写真のタンポポは、雑種の可能性が皆無とは言えませんが、一応カントウタンポポとセイヨウタンポポとして載せておきます。

（2）ニガナとオオヂシバリ

ニガナはみずき野町内のあちこちに見られるごく普通の多年草で、第2調整池にはとくにたくさん生えています。個々の頭花は約1.3センチと小さく、舌状花は5～7枚と少ないのですが、花がたくさん付くのでよく目立ちます。葉や茎を傷つくと白い乳汁を出し、苦みが強いのでニガナとよばれているようです。



ニガナ 第2調整池



オオヂシバリ 第2調整池

地面をはって広がり、ところどころに根を出して繁殖するたくましい植物です。ヂシバリ（地縛り）という名はこの特徴に由来します。

オオヂシバリはその外観から、タンポポと間違えられることもあるのではないかと思います。タンポポではなく、ニガナの仲間の多年草です。頭花や茎はタンポポより繊細な感じがしますが、見かけとは違って、下部の茎は枝分かれしながら



オオヂシバリの頭花

(3) その他、タンポポに似た植物たち



ブタナの頭花

ブタナは別名をタンポポモドキと言い、ヨーロッパ原産の帰化植物で、みずき野町内でもっとも目立つ植物の一つです。一番多く見られるのは、3丁目東側土手下で、ブタナが見事な群落を作っています。私はここを「ブタナが原」とよんでいます。このあたりの草は5月中下旬頃、すべて刈り

取られてしまいます。しかしブタナは多年草ですから、来年もまた「ブタナが原」が再現されるでしょう。ブタナの名はフランス語の **Salade-de-pore**（豚のサラダ）に由来するもので、植物分類学者、北村四郎博士による命名です。



ブタナ 3丁目東土手下



コウゾリナ
第1調整池北フェンス内

コウゾリナは在来種で、普通に見られる多年草の一つですが、みずき野ではブタナほど繁栄はしていません。第1調整池の北側フェンスの内側に群生していましたが、他所では見当たりませんでした。コウゾリナは、葉にも茎にも剛毛が生えていて、さわるとざらざらします。

コウゾリナの名はかみそりになぞらえたもので、漢字では「髪剃菜」「顔剃菜」「剃刀菜」などを書くようです。



コウゾリナ
葉や茎に剛毛が
生えている



ノゲシ さくらの杜公園
通常の頭花

ノゲシも道ばたや空地にごく普通の越年草です。普通、タンポポより少し小さめな黄色い頭花をつけますが、たまに頭花の周辺の舌状花が白い個体を見ることがあります。さくらの杜公園でも一度見たことがありますが、今年は見つかりませんでした。ノゲシはもちろんケシの仲間ではなく、葉がケシの葉に似ているので、「野芥子」とよばれているのだそうです。

ノゲシ さくらの杜公園
外側の舌状花が白い頭花



オニノゲシ 本町地区

ノゲシに似た植物にオニノゲシがあり、ノゲシと同様、**越年草**です。ノゲシは在来種ですが、オニノゲシはヨーロッパ原産の帰化種です。花はノゲシとそっくりですが、葉は緑が濃く、ふちには強靱なとげがあり、触ると痛いです。

葉のふちには
強靱なとげがあり
触ると痛い

(注)：越年草とは、秋に発芽して冬を越し、翌年に花を咲かせ、種子を作り、枯死する草木のこと。

(4) ふたたびタンポポへ

セイヨウタンポポやアカミタンポポは明治年間に日本に入ってきたと言われています。最初は北海道で帰化したそうですが、いまでは全国的に勢力を拡大しています。タンポポといえば、春の代表的な野草でしたが、1年中花を咲かせる帰化種の広がり、タンポポを目にしての季節感はすっかりうすれてしまいました。

「…

春艸路(しゅんそうみち)三叉(みつまた)中に捷徑(せふけい)

あり我を迎ふ

たんぽぽ花咲り三々五々五々は黄に

三々は白し記得す去年此路(このみち)よりよりす

隣みとる蒲公英(ほこう)茎短(みじかう)して乳を焔(あませり)

…」



上は与謝蕪村の「春風馬堤曲(しゅんふうばていのきよく)」の一部です。すでに老齡に達した蕪村が淀川を渡って毛馬の堤を故郷に向かうとき、浪花の奉公先からやぶ入の休暇をもらって帰郷する少女と前後しながら歩きつつ、少女に成り代って少女の心情を述べるという形式の詩です。実際にあったことというよりも、蕪村自身の望郷の念をこの一連の詩によって表現したものと思われます。そうであっても、蕪村がいつしか出会った、脳裏に焼き付けられた情景が表されていると思います。そこに登場させた少女は「容姿嬋娟(せんけん)として痴情憐む可し」とあり、つまり「容姿たおやか、色気も加わって愛らしい」のです。

上に載せた部分は、毛馬の長い堤を長い時間あるいて、故郷の三叉路の中のなじみの捷徑(近道)が少女を迎える場面です。そこには白いタンポポ、黄色いタンポポが三々五々と咲いています。少女はそれを見て思い出します。ここから去年の春、浪花に立ったことを。少女はいつくしんでそっとタンポポを摘み、短いタンポポの茎からは乳があふれ出ます。詩の中でもとくに感動的な一場面です。

ここに咲いた黄色の花は純粋なカンサイタンポポ、白い花は関西に多いシロバナタンポポと判断しました。少女にとって、また蕪村にとって、タンポポの咲く早春の故郷の小径のなつかしさは、現代人にも理解できます。しかし、在来種を駆逐して帰化種が圧倒的に増えてしまった今、タンポポへの親しみはすっかり薄れてしまったような気がします。

2014年6月
本吉總男

